
「愚者の楽園」

ありま翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「愚者の楽園」

【Nコード】

N8947S

【作者名】

ありま翔

【あらすじ】

「楽園のご招待」

張られていた、一枚のポスター。

水着美人がにっこりと、一小市民の楽園についてのお話です。

楽園にご招待

春つらら、青空の下で、てくてく、てくてくお散歩です。

散歩といたって、何の用もないというわけでもありません。ちゃんとしたワケ、とエバることもないのですが、腹が減ったのでパンでも買ってこようと思ったわけです。通い慣れた道をまあ、ぶらぶらと歩いていたらとこです。角を曲がろうとした時、電柱に張り紙があるのに気づきました。どこで留めてあるのか少し揺れています。真ん中に恐ろしくへたくそな画が描かれています。点が三つ、左右の横に棒が三つ。その点が目と鼻を表しているのは何とか理解できます。そうなると棒は髭だな、追々わかってくる判じものようです。それで有名なネコ型ロボットではない方の、ネコのキャラクターを模したのではと疑念がわいてきました。実際そうであったのかも分かりませんが、それよりも、左手に持っているソフトクリームもどきよりも、さらに右手のプラカードが目を引きまします。黄色地に赤で「楽園にご招待」と書かれているではありませんか。なんじゃこれ、と誰もが思うはずです。

ただ可愛くないネコの似顔絵が掲げている案内に良いことなどあるはずがありません。こんな宣伝文句に引っかかるとしたら余程のク*、失礼、よほどのアホです。

私は、そんなもの当然無視して角を曲がって、そんなビラのことなどすぐ忘れてしまいました。

春つらら、誰が生けたのか道ばたにはキレイな花が咲き誇っています。私は幸せな気分になって歩いて行きました。すると、道路の脇にポスターが置かれています。少し低い位置に風で運ばれましたというように水着の美女がにっこり笑っています。私もちよっとつい微笑んでしまいました。タイプと言えば、まあ否定はしません。彼

女は危害は加えませんと意思表示するように、手を広げていました。胸のところにスーパーマンのマークのように、「楽園」とプリントされています。うむっ、と目を見張って眺めると下の方に「楽園にご招待」とまた書かれていました。

これは少しおかしいぞ、と私のアンテナがピクピク動いています。当然これは比喩であって私がアンテナを持っているわけではありません、念のため。

警戒信号が鳴っています。同じく比喩ですが以下この文言は省略します。

地上の楽園

(警戒音が)鳴ればなるほど、心惹かれていくということはあるものですよ。

これには何かの意図があつて、私にだけサインが送られているのではないだろうか、というような考えも起こってきます。「自衛官募集」というのとは若干意味合いが違うのではないかと更に考えます。

下手な考え休むに如かず、ということばが浮かんで頭を振りました。私はパンを買いに来たのであつて、楽園に行こうとしているのではないのだ、と思ひだしました。

多くの思いを振り払つて、コンビニに入ります。と、その時入口のドアにあのまた下手な画が描かれたビラが貼られているのに気づきました。気づいても無視してとりあえず、パンの売り場に行つて眺めていましたが、動揺したのか選ぶことができなくなつて目についたものを二つ掴んでレジに戻りました。あんなビラをなぜ貼っておくのか、と若い店員を問い詰めても埒がないので黙っておきました。そしてそのまま帰ろうとしましたが、どうにも気になつてドアの前でビラを見ていました。

下のほうに小さな字で主催「エヘン省」と書かれているので、どうもこれは、国家プロジェクトであるらしいことがわかりました。こんなものはインチキ宗教かサギのグループかと思つていただけれど、どうもそうではないらしい。税金を使って役人が計画したものですよ。

「地上の楽園」計画はかつてあつたようです。10万人の在日朝*人の帰国事業がそれでした。かの將軍の夫人もこの時期、海を渡つ

たのでした。ただ他の人間はほとんどク*、失礼、悲惨な生活を余儀なくされたようです。当時日本の政府も政党もこぞって賛成した事業であるといえます。どうして地上の楽園が北朝*にあると信じただのでしょうか。でもそれは50年も前の話で、この楽園とは関係ないんだろうと思われませんが、どっちにしても胡散臭いことには変わりありません。

国のやる殺人は合法だし、戦争でたくさん人を殺せば英雄になれる。もちろん勝った場合ですが。インチキ宗教や サギのようなことを国が大々的にやると許されてしまうような歴史があります。そして騙されたり傷ついたりする者は愚者であるということです。

でもちよつと興味あるな、取りあえず失業中でやることないし、と心浮わつく私でした。

日々の楽園

帰ってネットで調べてみると、この事業は大々的ではあるが、問合せの仕方が載っているだけで公開はされていないらしいということ。それにあの下手な絵は超有名な画家の作品らしい、ということがわかりました。

楽園はともかく「楽園にご招待」のご招待ってなんなんでしょう、いかがわしい一泊温泉旅行みたいじゃないか、と私は考えていました。それに楽園マークの女は何なのでしょう。彼女は私の好みだけれどなにか意味があるのでしょうか、いやいや意味なんかないに決まっています、これは私が生きてきた長年の知恵ですが、女は眺めてるだけでいいんです。いや、少し脱線してしまいました。

パンも食べたし、こんな時は眠るに限る、と私は思い直しました。少なくとも悩まなくて済むし、起きたらいいことがあるかもしれない。日々の楽園です。しかしいい天気だなあ、と上を見ていたら私はソファで眠ってしまったようです。

何か夢を見ていたらしく、目が覚めると、わあー遅刻だ会社行かなくちゃ、と無闇に焦りました。

明るくなってる、何時だろうと時計をのぞくと14:14と表示されていました。

なにっ、イヨイヨっていったいなんだ、ク*、失礼、と更にパニックりましたが、会社を辞めていたことを思い出しました。そうだ、昼寝をしていたんだ、と気づきました。

少し落ち着いて、起きだして水を一杯飲みました。

それからパソコンの電源をいれて、ニュースをチェックしていきま

した。

世の中には、何らかの事件が起きているようですが、私に関係するようなことは何もないような気がしました。初めにお断わりしておきますが、私はたびたびアダルトサイトを覗くような人間ではありません。それは好奇心から一、二度は開いたことはありますが、観察をしてそれからは見ることもありませんでした。

さて、テレビも壊れていますし、新聞もとっていないので、私の情報はネット新聞で得ていたわけですが、眺めていたその大手のニュースサイトの下のほうに、あの「楽園」マークの女を発見したのでした。その時はビックリもしましたが胸がときめいたのも事実です。ちよつと身を乗り出してしまいました。

それはサムネイル画像のようになっていたので、多くの人は見逃したかもしれませんが、私には焦点が結ばれるようにピツという電子音が鳴っていました。実を言えば彼女はスーパーマン的でもありませんでしたが、某菓子メーカーの走る人のようでもありました。白い水着で、手を空に挙げ片脚を持ち上げていました。それは私にはとても魅惑的なポーズに映ったのでした。そして濃いピンクで胸のところに「楽園」とプリントされているのです。

愚者の選択

私は胸のときめきのまま何気なくですが、彼女の胸のところをダブルクリックしてしまったのです。すると画面が変わって、拡大された彼女が現れ、ニコツと微笑むのでした。私も知らずに、にやけてしまいました。しばらく眺めていましたが、画面の下のほうで何かが点滅しているのに気がつきました。

「あなたは未成年ですか？」

「はい、いいえ」の文字が点滅していたのでした。

私は少し考えました。

とうぜんですが質問の内容についてはありません。この質問に答えるべきか、についてです。催促するように点滅が続いています。これは既知のことではないのか、とささやく声が聞こえます。ただ質問に答えるとどうなるのかの好奇心もあります。それにそんなひどい状態にならないだろうという読みもありました。以前架空請求のようなものに出くわしても、無視することで切り抜けました。

わたしは「いいえ」をクリックしました。

画像が変わりました。上に挙げていた彼女の手が下がって両手を広げています。「あなたに救いを！」みたいなポーズです。それに今度は深遠な笑みを浮かべています。

「あなたは二〇歳以上ですね？」

再確認の質問が表示されていました。

私は今度は躊躇なく、と思っただけで考えました。これはひっかけですね。さっきはいいえでしたが、今回ははいです、とクリックしました。

画面の彼女はさらに手が下がりました。弥勒菩薩のポーズです。人差し指が頬を指しています。超魅力的です。

「あなたは健康ですか？」
むむっ、と私は考えました。

疑問は、健康は何に關係するのだろうか、というものです。こう見えても私は慎重な性格ですし、堅実な見方をする人間です。でも結局意図は解りませんでした。ただ私は体に悪いところはどこもなくほとんど風邪もひかないぐらい健康であるというのは事実でしたので、彼女を眺めながら、はいを押ししました。

すると画面が変わって、南太平洋というような海と空の景色が現れました。デッキチエアーには彼女が横たわっています。それに被るように赤い文字で、「あなたは楽園に招待されました」というテロップが流れました。

ハワイアンのような音楽まで聞こえています。

私はちよつと呆然としていましたが、何やら大失態を演じたような、あるいはそれこそ恥ずかしい場面を覗かれたような気持ちになって、ばたばたキーボードを叩いていました。ク*、失礼、と呟きながら、ようやく強制終了を操作して電源を落としました。

それでもしばらく私は暗くなったモニターを眺めていました。

楽園への招待

その画面（見ていたモニター）から、強制執行の官吏が出てくるような妄想が起こらなかったわけではありませんが、もともと私は現実的にものごとを考えるタイプですので、何が起きたのだろうか、ということが先に立って、頭を整理していたのですが全然考えがまとまりません。急に尿意を催してトイレに行き、帰りに顔を洗ってきました。

少し冷静になって戻ってきたと思います。そしてパソコンの前に座りなおしました。

「あなたは楽園に招待されました」ということは、どういうことで、それは取り消しができないだろうか、というのが当面の問題です。私はそのク*楽園、失礼、そのいかがわしい楽園になんか招待されたくはないのです。

それで、恐る恐るですがパソコンを立ち上げることにしました。このままにしておいて、いいことはない、と経験が語っています。私はひとかどの人間として、社会で有能であることに自信を持っています。借金をしたら返すのは当たり前です。ただお金がないと、それもままならないというのも事実です。おっ、少し脱線しました。

電源を入れた後、ひどく長く感じましたが、いつものようにシステムが稼働して、暗証番号を入れるとトップが表示されました。何も変わりはありません。あの出来事はなかったことになったのかも知れません。少なくともスタートに潜り込むようなプログラムはないということです。ネットの回線も通じているので、ホームを呼びます。

ネット新聞の画面になりましたが、彼女の画像は探してもありませんでした。

いくぶんホツとしたものの、そんなわけはないだろう、というような奇妙に錯綜した思いに取りつかれています。私は再度言いますが、現実主義者なので幽霊なんか信じませんし、また同じ理由で、有るものが消えてしまうことなんか、にわかには信じられないのです。

「楽園にご招待」とあれほど、はっきり表示されていればコンピュータは記憶していますし、そのプログラムを組んだ人間はどこかでそれをチェックしている可能性があります。ただ私は少し疲れてしまつて、それ以上そのことを追及する意欲がなくなつてしまいました。それでやはり眠ることにしたんです。

何もなかったように、すぐに眠りは来ました。南太平洋かはわかりませんが、深海で明かりがゆらゆら揺れている夢を見ていました。

愚者の面接

のど元過ぎれば熱さ忘れる、という言葉がありますが、また借金も催促がなければ忘れて過ごせるように、どうしたんだろう、と思いつながら数日が過ぎると、後遺症が消えるようにそのことは忘れてしまいました。散歩の途中で下手な猫のビラを見ることがもなく、「楽園」マークの美女も消えてしまいました。と言っても実際には彼女に会ったこともないので、その画像を見かけなくなった、というのが正しい言い方なのかもしれません。ときどき、ドキッとすることはあるのですが、例えばビールの宣伝ポスターのモデルが少し似ている気がしたりですが、彼女の微笑みとは全然違います。彼女の笑顔は営業用のそれとは異質のものなのです。でも、おおむね忘れ去られていたと断言できます。私が再就職活動で忙しくしていた、という事情もありました。

それで10日ほど経った日、私は一部上場の某シンクタンク系の会社の面接を受けていました。途中採用の募集があったからですが、まあ無理かなと思いつつも、万が一という可能性に懸けて都心のビルに足を運んだのです。

ひどく広い部屋でした。正面に演壇があつて、小さな講堂といった感じの部屋なのですが、やたらと椅子が置かれているのに、私しか応募者がいないようでした。私はそこでぼつねんとして、しばらく待っていますと、演壇のわきから五十代と思われる男の人が現れました。背は高く気品のある様子ですが、部屋着のような穴の開いていそうなカーディガンを羽織っています。若干白くなった髪も乱れがちです。彼はいかにも昔風の研究者というタイプに見えました。

「この会社はク*です、いや失礼」
と彼は、最初にそう言いました。

音響設計がいいのか、見えないマイクを使っているのか四方から彼の声は聞こえてきます。落ち着いて響きのある人を酔わせるような声です。

「*くん、きみは招待されていますね」

次に彼は、私の苗字を呼んでそう尋ねました。

招待ではなくて応募をしたのですが、と私は考えていました。

賢者の節度

「あなたは招待されていますね」

エコーがかかったような質問が、再度発せられました。

彼はじっと私を見ています。誠実そうで何やら私を憐れんでいるようにも見えます。澄んで深い色をたたえた瞳です。

私は何か言わなくてはいけないようです。

少し目を伏せて、「質問の意味が解らないのですが」と言いかけて、もしかしたら、と思い当りました。

「何の招待でしょうか」

質問に質問を返すのは、大変無作法な態度であることは承知していましたが、それしか言葉が思いつかなかったのです。というよりも、つい呟いてしまったというのが当たっているかもしれません。

明らかに彼は失望の表情を浮かべました。これは、この面接に私が不合格になったということをはっきり解らせるような態度でした。私は非常に恐縮して、自分が小さくなったように感じました。

それから彼は賢者が愚者に対する節度を思い出したように、静かに頷きました。

「とうぜんク*、失礼、楽園への招待です」

このク*という言葉は彼の癖になっていく言葉のようでしたが、実際は私の癖をマネしているのかもしれませんが。さり気なく私の非礼を悟らせているのではとも思いましたが、それよりもその後の言葉に私は今更ながら、飛び上がりながら驚いたのです。ク*楽園の招待は消えてはいなかったのだ、と改めて思い知らされたというわけでした。

彼はモゾモゾと上着をいじっていました。どこからか例の猫のおもちやのようなものを引つ張り出してきました。ソフトクリ・ムもときにはN、プラカードにはYと書かれています。

「このNはNo、YはYesです。どちらかのボタンを押して、答えてください」

と、ゆっくり近づいてきて、私に手渡ししました。

「私には質問の答えがわからないようになっていきます。だから正直に教えてください」

彼は私の目を見て言いました。

「質問してもいいですか」

と私は恐る恐るではありませんが、口を開きました。

愚者の反抗

「残念ですが質問は許されていません」

彼はまた、憐れむように私を見て答えました。慈悲深い表情と云つてもいいと思います。ただ、この場合私にも納得できない理由があります。

猛然と怒りが湧いてきました。

罵声を浴びせながら、持っていた例の猫を彼に投げつけ、もちろんぶつける気持ちは毛頭ありませんが、そして猛烈な勢いで外へ出よう、とは考えたのですが、私の憤みがそれを許しませんでした。

結局、私はその猫のおもちゃを隣の椅子に置いて、立ち上がりました。消えるようにこの部屋を出ようとしたのです。当然その権利が私にはあるはずでした。私は憤然として、つかつかと出口に向かいました。彼には一瞥も投げかけませんでした。

非常ベルのようなものが鳴っています。展開としては彼が隠しもつていたそのボタンを押したのでしょう。私がそこから出ようとしていたドアが開いて、大仰な槍を持った白いマントの人が現れました。西洋の騎士の出立です。あるいは何とか仮面なのかもしれませんが、私にはその知識がありません。そしてその人は出口の前にすくと立ちました。そしてまさに門番のように立ちふさがったのです。

「どいてもらおうか」

私は少し芝居がかかった調子で言いました。なぜその言葉を発したかはわかりませんでした。その門番は何も答えず、かつ微動だにせずその胸の前に掲げた槍は鈍く光っていました。

ただ胸には膨らみがあるようにも感じられました。

天井から声が聞こえてきました。

「きみはいすれ外に出るのだから、私の話を聞いてからでも遅くはないでしょう」

あの魅惑的な声で、現状が説明されました。振り返ると壇上には誰もいません。彼は退避したのでしよう。

「席について作業を進めましょう」

私にはいくつもの疑問がありましたし、その作業を進めることに抵抗もありましたが、またこのような強権的態度に反発を覚えながらも、逆らうことのできないような気にもさせられていたので、渋々と席に戻りました。

ただせめてもの反抗に、猫型の装置はそのままにしておきました。そして少し、くだけた座り方をしてみました。私は快く思っていないだ、という表現のつもりでした。

賢者の質問

そうしながらも私はいろいろ考えていたのですが、状況がいまいち解らないので、相手の出方を窺いながらも、情報を引き出そうという結論に落ち着きました。

それで少し姿勢をただし、猫型装置を手に取ったのでした。

「では、始めます」

それを見計らったかのように、当然監視カメラのようなもので覗かれているのですが、天井から声が流れました。私はあたりを見回しカメラやスピーカーを探しましたが簡単には見つかりませんでした。ついでに門番の様子を窺いましたが、そのままドアの前に立っていました。

Y 「あなたは今朝、食事をしましたか？」

N 「あなたの両親はご健在ですか？」

N 「兄弟姉妹はいますか？」

N 「あなたはたばこを吸いますか？」

N 「結婚していますか？」

N 「恋人はいますか？」

その時後ろで音がして、振り返ると門番が衣装？を脱いでいるとこ

るでした。仮面をとって長い髪を少し揺らしてから手で梳いています。例の彼女であることは明白です。甲冑のようなものは取り除かれ、白い水着はたぶん白いブラウスで隠されていました。タイトなスカートに緩めの上着を着ています。その彼女は少し近づいてきて足を組み私の斜め後方に座りました。

それからも質問は続きましたが、私は上の空というほどではなかったのですが、考えるような内容もないため機械的にボタンを押していました。

たぶんこれには質問の意図を探らせないためのダミーの質問が加えられているようです。例えばあなたはコーヒーが好きですか、のよ
うな質問はこの場で意味をなしていないように感じました。

「これで、質問は終わります」

私には質問が許されなかったので、ひどく恨めしい気になっていました。

すると彼女が立ち上がってこちらの方にやってきました。

「それでは、その書類にサインをしてください」

と天井から声がします。

愚者の作戦

これは（彼の言葉は）かなりきっぱりとした調子で、彼はこれを言い残して席を立ったというような様子が見てとれました。彼女はゆっくり近づいてきてあの微笑みを浮かべて私に書類を渡しました。表紙には雇用契約書というような文字が見えます。

私は胸がドキドキしていましたが、比較的冷静に、

「説明をしてくれませんか」と彼女に尋ねました。

彼女は少し無国籍風なので、言葉が通じるか心配するほどでしたが、言葉は理解したようです。

「それは許されていません」

ぞくつとするような声質でした。そういえば甘い花の香りのようなものも漂っています。私は初めから怒るタイミングを外してしまっているのです、うまく怒りを表現できなくなっていました。でもこの一連の仕打ちには腹が立っていました。

「では、何があなたには許されているのですか」

と私は皮肉っぽく尋ねました。

彼女はあまり困った風でもなく、ニコツと笑いました。それでこの質問は帳消しになってしまったのです。

私は少し口をへの字に曲げましたが、彼女を許すことにしました。彼女は銀行の事務員みたいなもので、借金の取り立てに来る輩や、ク*、失礼、経営者とは違うんだという常識を持っていたからです。

「では、この書類にサインしたらお茶に付き合ってもらえますか」
なにやらクレーマー的言辞を持って私は応えました。

買ったパンがまずかったからほかのに取り替える的な発想です。あの意味私は必死でした。情報が少しでもほしかったのです。もちろん

んそれは彼女と一緒にいたい、という気持ちを否定することではありません。

私は彼女の顔を覗き込みましたが、その表情からは何も読み取れません。

そこで、彼女が中腰のままなのに気づいて椅子をすすめました。実は私は書類をしっかりと受け取っていなかったので、彼女は書類を持ったまま、立っていたのでした。

愚者の策略

(座ることのすすめに)彼女は少し迷ったようですが、私が書類を受け取って椅子を少し引いたので、座る気になったようです。一つ席を空けて斜めに視線が絡むような場所です。

彼女の選択肢はいくつもあります。はいと言って、お茶を飲む約束を反故にすること。これは私の要求が不当なのでたぶん許されるでしょう。後はいいえと答えること。いやですということです。それに提案を無視することもできます。でも、たぶん彼女は私から署名をもらうことをミツシヨンにしているはずです。実際は書類の内容が問題なのですが、その議論はできないことになっています。また、もちろんこれは不当なことなのですが、あらかじめプログラムの中に組み込まれていて、私には逆らえないような気がしています。また逆らえば前回のように強硬手段も用意されているようです。これは一種の儀式なのでした。あたかも私がこの訳のわからない企てに自主的に参加したような体裁を作ろうというたくらみです。すべては決まっています私の自由の余地はないということです。

私はパラパラと書類をめくりました。

そこには私にとっては破格の条件で雇用されることが記されています。私はそのためにここに来ていたので、晴れて採用されたことで喜ぶべきなのですが、どうも腑に落ちないことがあります。

私の願いはこの儀式を逆手にとって、彼女とコンタクトがとりたいということでした。一種の冒険ですが、いい感じに進んでいるのではないかと希望を持たせる展開になってきました。

「了解ですね」

返事を聞かずに、私はあたかも了承を得たように装って一気にサインをしました。そして書類を彼女に渡すと、立ち上がりました。

彼女もすぐに立ち上がって出口の方に向かいました。それから脱いだ衣装の上に書類を置くとそのままドアを開けました。そしてドアの外で、アパレル店員のように待っていました。私が出ていくと少し顔を近づけ「エースで待ってて」と、例のぞくつとする声で告げました

そして中に入り、ドアを閉めてしまいました。

賢者の事情

（彼女が入っていった）木のドアを、その時初めて木製であることに気付いたのですが、私はしばらく中を透視するかのようには眺めていました。そうすれば何か合点がいくかのようにですが、当然見通すこともできず、音も聞こえてはきませんでした。彼女とはここでお別れでは、と不安もよぎりました。何度も約束を反故にされた苦い経験があるからです。そんなウソをつかさせる私が悪いのでは、と思い当らないわけでもありませんが、人の心を玩ぶようにして金を巻き上げるやり方は、まったくク*です。いや失礼、それにまた脱線したようです。

新たに今度は彼女はひどく警戒していたのではないだろうかと思い始めました。何か怯えていたかもしれません。事情を説明することが許されていないのは誰からだったのでしょうか。

欲に目がくらんで、判断が甘くなるということは私に関してはない、と信じたのですが、むしろ問題は判断に過度の信頼を持ちすぎる傾向が私にあるのではないかとの懸念です。まあ、一般的に言えば、独善であり固陋です。実は、はつきり言っただけ私に会社をクビになったのは、そこにあると指摘されてしまいました。でもそんなことク*くらえです。失礼、本当に失礼しました。クビになったことを考えるとツイ興奮してしまうのです。

そういえば、と私は思い当りました。最初に面接官が「この会社はク*です」と言ったのはなぜだったのでしょうか。明らかにあの会社は政府とつながっています。彼は、彼らに所属しているのですが快く思っていないのでしょうか。私を面接するのも嫌だったのか、彼女との関係はどうなのでしょう。

すると彼の言葉が不自然であつたようにも感じられてきました。

「私には質問の答えがわからないようになっていきます」というのはどういうことだったのでしょうか。その後の「正直に」ということばに注意が行っていたけれど、質問する人がその答えを知らされないということは何を意味しているのでしょうか。明らかに何か裏がありそうです。彼は私にサインを送っていたのかもしれませんが。

いろいろ疑念が湧いてきて、木製のドアの向こうに、その秘密が隠されているのではというようにドアをにらんでいましたが、ふと私は彼女が言った「エース」というのが何で、どこにあるか探さなくてはいけないことを思いだしました。

愚者の真実

私は踵を返して、ある意味勇んでビルを出ました。

不安ですが、彼女のゾクつとするような声が耳元に残っています。期待に胸ふくらまず、というような状態に自分になっっていることを意識しました。なんだか変なところはありますが、条件のいい就職先が決まったことは事実のようでしたし、そうすれば借金も返して、まだよくはわからないけれど、全体として自分の好みである「楽園」マークの彼女に実際会って、二人で話ができるという状況になっているのです。ある意味「楽園」が落ちてきたとも考えられるのでした。半分は胡散くささを残してはいても、光明がみえてきたのではないでしょうか。

外に出て、見上げると正面に「エース」と書かれた看板が見えました。来た時に見かけただろうかと記憶を探りましたが、わかりませんでした。すぐに見つかったことを喜ぶより、不審な感じの方が強く残りました。

とにかくそのガラスだらけの店に入っていきました。その店はガラスでできているようなのですが、透かして先が見えるということはなく、いろいろ組み合わせる海のような感じになっています。本当は海底に入ったことはないのですが、どこかで見たりしていたイメージ通りでした。

案内の人はいないのか見回したのですが、誰もいないようなので、その緩やかなカーブの付いた薄ぼんやりした通路を進んでいきました。すると中は迷路のようになっていて、二、三度曲がったら、完璧に自分の位置を見失いました。

すぐテーブルがあって、座席があるというカフェみたいなのを考

えていたのですが、言ってみればカラオケボックスのような、個室になっっている感じで全然部屋に行きつかないのでした。彼女がすぐわかるように一番入口に近い席と考えていたので、それは誤算でした。そういう仕組みにはなっていないようでした。と、するとあの無人の受付に戻らなくてはいけないのかと思いました。

しかし、よく見ると潮の流れのように通路の明かりが徐々に点滅して、何か行き先を告げているようにも感じられます。同じ場所を下に円を描くようにしているとも見えるのですが、足元に注目すると、やはり点滅して通路を指示しています。これは無人の誘導システムなのだろうと見当を付けて、私はそれを辿っていきました。するとそれまでの青い照明がピンクになっっている部屋に着きました。ガラスのドアには「楽園」と表示されていました。私はひどく絶望してしまいました。

「樂園」という部屋

(私がひどく絶望感に捕らわれたのは)これがあの計画の一端ではないかと感じたからです。味方だと思っていた彼女はやはり敵方だったのだ、というように裏切られた気がしたのでした。

また自分に引き寄せて考えれば、よく社会で経験するような、彼女の職業意識、あるいは営業そのものではないのかということですが、私が真心を求めているのに、彼女は保険の外交員のように私の財力であったり、サービスの提供を求めているだけではないかと感じたのでした。なぜなら、すでにそこは「樂園」という名の部屋だったからです。私が純真なものを求めているのに、まあ、それほどではないのですが、泥交じりの現実をみせられる気にさせられていました。

ク*樂園、失礼、という部屋がすでにそこにあって、つまり何らかの意図のもとに設置されていて、私は導かれるままそこに辿り着いてしまった、という事実が私をやるせない気分にならせていました。

「樂園にご招待」計画の樂園が、この部屋であるのでしょうか。それでも、私は入って待つことにしました。

もう選択の余地はないように感じていたからです。まな板の上の鯉という言葉がありますが、周到的計画であれば、どんなことでも完遂してしまい自分の手に余るといような諦めも、私の中に生まれ始めていたのでした。打たれても立ち向かっていくような不屈の闘志を、私が持ち合わせていないことは知っていました。どちらかと言えば私は流されてぬくぬくと生きていきたいのです。だから、あえて言いますが、あまり上等ではないソファにゆったりと腰かけ、何が起きるのか確かめる気になっていたのです。

しばらくすると注文をとり小さなエプロンをしたスタッフが現れましたが、まがうことなく真正銘のあの「楽園」マークの彼女でした。ちょっと目配せをすると退出しましたが、すぐ飲み物を持って戻ってきて、私の隣に腰を下ろしたのです。それは以前とは打って変わってひどく親しげで、くつろいでいるように見えました。私の目をじっと見ましたが、その目は興奮しているのかうるんで見えました。

「これで大丈夫よ」と彼女は言いました。

何が大丈夫なのか私には理解ができなかったのですが、とにかく彼女がここに現れリラックスしているとしたらうれしいことです。

「来てくれてありがとう」

偽らざる気持ちでした。私は虚勢を張っていて、本当はひどく心細く感じていたのかもしれない。ただ100パーセント彼女を信じているわけではありませんでした。

賢者の助手

「何か質問があるのでしょ」

と彼女は微妙な感じで微笑み、尋ねました。

「私は何をするのですか？」

少し考えましたが、単刀直入に聞きました。

「それはもう説明されていたでしょ」と彼女は答え、私が怪訝な顔をすると、少し上の方を見てから話し始めた。

「やはり通じていなかったのね、契約の前にも私は暗示していたのよ」

私は契約書をそれほど信頼していませんでした。わざと分かりにくい言葉で説明されていることはそれを結ばせようとしている者の都合だけです。「離婚」を前提に「結婚」をするのは、現実的ではあるけれど、真実からは遠いものです。私は説明を求めていたのにそれを拒否したのは彼らです。これは違法な利息みたいなものでした。「妨害されていたのね。私は何度もあなたとコンタクトを取ったのよ。でもあの地獄の賢*に邪魔されていたのね」

彼女は「地獄の賢*」というのを何度も言い直していましたけれど、最後までどうしても言うことができませんでした。ひどいトラウマがあつて、その言葉を言うことになにか支障があるようでしたが、そこで切ってしまうと任侠の通り名のような「地獄の賢」は「地獄の賢者」なのだろうと私は推察しました。

「楽園にご招待プロジェクトはもともと政府によって進められた計画なの。国民には公表されてはいないのだけど、海底プラントの開発計画があつたの。S教授が最初に考えて、結局はその危険性を考えて反対に回つただけで、相棒でもあつた地獄の賢*がその研究

内容を盗んで地下に潜ったの。そしてそこからいろいろ工作して、プラント事業を立ち上げていったの。利権に群がってくる連中は排除できなかったのね。産業界、学界、政界を巻き込んで、あつという間に計画は進んで、教授は蚊帳の外で、開発は大規模になっていったというわけだったの。さっき面接したのが教授よ。私は彼のスタッフなの」

私は黙って彼女の説明を聞いていましたが、ちよつとこんがらかつてきました。でもそのまま彼女の話を邪魔しないで聞いていました。彼女の顔を眺めていたといつても間違えではありません。

愚者の行動

「海底の力を見くびったのね。怒りに触れたとも表現できるわ。そのプラントが、簡単に言うのと壊れたの。非常に危険な状態にあって、地獄チームはそれを修理することができなくて、性懲りもなく教授に助けを求めたの。教授はそれが危機的であることを知って、回避できなければ地球規模の災害になってしまうから、仕方なく協力することにしたのよ」

彼女は一息つくくと、さつき持つてきた飲み物を優雅に飲みました。「人材が必要な。イヨイヨの時に必要な楽園にご招待プロジェクトといえはわかるわね」

彼女のその言葉を聞くと、頭の中がすつきりしたようで、私は思い出したのでした。事の発端の彼女と猫の画のポスターを見た日です。昼寝をしていると夢の中で、彼女が今したような説明をしていたのです。あなたは選ばれた英雄なの、みんなの期待があなたにかかっているのよ。確かに彼女はそう言いました。あの猫の画は「地獄チーム」の象徴なの。教授は貧乏な賢者。はつきり彼女は言っていたのでした。なぜ忘れていたのだらう。

「猫の画の陰謀なの。私たちにはほかのミッションもあるのだけれど、特にその部分は記憶が消されてしまうの。あくまでも自分たちの都合のいい情報しか思い出さないように細工されているのよ。それに夢だけでなくすべての情報が操作されているの。それで私たちは1414計画でそれを打ち破ることにしたの」

それでイヨイヨと聞いて記憶が戻ったのだらうか。

「これほどの事故を起こしたにもかかわらず彼らはまだその計画を

捨てきれずにいるの。ここからが大事なことなのだけれど、教授は彼らの裏をかいてそのプラントを閉鎖しようとしているの。修理をすると称して、もちろん危機的な状況は回避して、同時にその運転を停止して閉鎖するプログラムを内部に埋め込むの。その作業をあなたができることになったのよ」

彼女は興奮して私の手を握るようにしていました。私も人類を救うためにその海底プラントに向かわなくてはならない、という強力な使命感がめらめらと湧き上がってきました。それに彼女にトラウマを与えるような「悪魔の賢者」に一泡吹かせなくてはなりません。

「私があなたを選んだの。あなたはあの面接を会社の採用試験だと思っていたと思うけど、それは地獄チームの仕組みだことなの。そこでも私たちは裏をかいて、私の『お見合い大作戦』にしたの。地獄チームの質問に私からの質問を混ぜたの。『恋人がいるか？』なんて不思議だったでしょう」

話は大体わかったんだけど、と私は考えました。すごくうれしい気はするけど、それってかなり危険じゃないのだろうか。

愚者の品格

英雄的行為には危険は付きまといまます。誰が考えたって、その修理に危険がないとは思いません。けれどその事実を彼女に確認するにはひどくプライドが傷つくし、また彼女に臆病でいやな奴に思われるのだからとは考えていましたが、咄嗟に次の言葉が口に出てしまったのでした。

「できるでしょうか？」

ちよつと弱気な言辞ではありますが、私としては与えられた使命に怯んではないところを彼女に汲んでほしいと思いましたが、また危険に立ち向かっていく姿勢を何とか示そうという苦慮した内容になりました。要は彼女に認めてほしかったのです。

「あなたは選ばれた人間なのよ、自信を持って。危険はないと言わないけれど、万全の態勢で私たちは挑むのよ。後遺症が出るとしてもそれはあなたの寿命の尽きるあとよ」

私は彼女の言葉を頭の中で転がすように吟味していました。怯懦を見せないひとかどの人間と思われるという努力を続けながら、少ない情報から真意をつかもうとする試みは人間の品格を表すものです。

私は見てくれを非常に大切にしているのです。侮蔑は死よりも耐え難いものです。

彼女の話进行分析すると、この作業は非常に危険であること。直接的な被害はないかもしれないが後遺症は死に至るほどであること。ただその時期は明確にされていない、ということがわかりました。これが冷静な判断というものです。でも実際には私は全然冷静ではいられませんでした。

私は彼女の手を握り締め引き寄せました。

これは純粋な行為というものではありません。感情を共有しようという意味合いはありましたが、私は彼女とキスがしたかったのです。一緒になれたら死んでもいい、というような求愛の行動です。

彼女はそれをやんわり拒否しました。いつの間にか私の手は自分の膝の上に置かれていました。

「私はあなたのものなのよ、焦らないでね」と彼女は静かに言いました。

私は塩を振られた青菜のように、ぽかーんとしていたかもしれません。

彼女が何を言っているのかわからなかったからです。

「楽園にご招待計画というのは、もともと私があるあなたを気に入るかどうか、ということが重要な問題だったの」

彼女は続けます。

「あなたは私に何をしてもいいのよ。私はあなたの欲求にはなんでも応えるの」

彼女は少し顔を赤らめたかもしれません。

前に商店街のくじの景品のようにだな、と私は漠然と考えていましたが、やはり最初の直観のように温泉旅行ご招待的イメージは間違っていないかったんだ、それにすごく刺激的だと私は会心の笑みを浮かべました。

愚者の楽園

彼女は静かに立ち上がると、こう言っ外へ出て行ってしまいました。

「さあ、行って。あなたは戻ってこれるわ」

私はしばらく呆然としていましたが、部屋を出ると照明に導かれるまま、だんだん奥深く、なんとなくそう思っただけなのですが、進んでいきました。どのくらい時間がかかったのでしょうか。竜宮城のような、入口だけですが、光り輝くプラント工場に着きました。内部はがらんとして瓦礫のようなものが散乱しています。一部が真っ暗になっていました。私の作業場はそこにあるようでした。

そこで赤い服を着た人が待っていて、ずいぶん陽気そうな人でしたが、酔っているのかもしれない。その人に作業の説明を受けました。

ここでの作業は肉体的にも、精神的にもきついものでした。

それを話すと長くなりますので簡単に説明しますが、ドームと呼ばれる管理区域があつて、その穴に入って、単独で作業するのです。

と言つても実際に作業するのは電気掃除機のようなロボット、このロボットは私をモデルに教授が作成した物のようでしたが、彼をまずドームに入れることが仕事でした。

ドームに近づくとまず耳鳴りがしてきます。溶接炉のような熱風ではなく、直接温度が皮膚に張り付くような熱があります。タラップを下り、高いところの電球を取り換えるように覗き込み、上からはがれた壁の一部のようなものが時々落ちるからですが、上を窺いながらロボットを所定の場所に置くのです。

ドーム内は青白い光で充満しています。脳と言わず内蔵と言わずすべてが揺すぶられるように振動します。吐き気もひどく胃袋もひっくりかえるようです。たぶん遠くから私を見れば青白い光を発しながら揺れているのがわかるでしょう。

私の作業はそれだけでは終わりません。

ロボットもひどく消耗するからです。彼が何をしているのかは正確には私にわからないのですが、部屋の配置換えのようなことをしていると思ってください。あちらのものをこちらに動かし、出てきたごみは片付け、そこに何かを運んでくるというような作業です。

5時間ほどするとかれはぐったりとして、もうほとんど動けなくなつて助けられみたいにあームを動かすのです。私はそれをモニタ―で見ている、彼が合図をしたらまたドームに戻って彼を回収します。そしてスリープと呼んでいる装置に彼を収納して彼の回復を待つのです。これで一日、と言つてもそれが本当の一日であるかはわからないのですが、その一日の作業が終わって私も眠ってしまいました。こんなことが何年も続きました。

『こんな生活でしたが私は幸せであつたと思います。眠れば優しい光にあふれた、色とりどりの花々の咲き誇る楽園に暮らしていました。澄んで純粹な大気に、偽りは住めません。彼女の愛を確信し、その愛に満たされ、そこで多くの祝福を受けた彼女との暮らしに私は満足していました。』

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8947s/>

「愚者の楽園」

2011年5月27日12時22分発行